

# ブリジット・ジョーンズの日記 きれそうなわたしの12か月

2005(平成17)年5月3日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督=ピーバン・キドロン/出演=レニー・ゼルウィガー/コリン・ファース/ヒュー・グラント/ジャシンダ・バレット (UIP 映画配給/2004年アメリカ映画/107分)

……新たに1月1日から書き始めた『ブリジット・ジョーンズの日記』のパートIIは、恋愛ハッピー状態からスタート。お相手はハンサムな人権派弁護士で毎日が超ラブラブで充実したセックス生活満喫の日々！ しかし、その陰にはオンナあり……？ ドジでちょっと(?)太めのブリジットがオンナの本音をさらけ出しながらの行動は魅力いっぱい……？ その結果、ブリジットは無事「勝ち組」となれるのだろうか……？

## 納得いかない、パンフレットなし……

この映画についてはパンフレットが販売されておらず、原作本だけが販売されている。「それはなぜか？」と聞くと、ブリジットのプライバシーを守るためとのこと。そんなバカな……？ ブリジットの日記に描かれた内容をテーマとして映画をつくったのに、そのパンフレットをつくって販売するとブリジットのプライバシーを侵害することになるとは何ともケツタイな理屈……？

結局パンフレットは購入できず。そうかといって、原作本を買って読むほどの意欲もなし。そのため、この映画の坂和流映画評論はごく簡単に……。

## 女の子が考えることってホントにこんなこと……？

レニー・ゼルウィガーが2001年の第74回アカデミー賞主演女優賞にノミネートされた前作を私は観ていない。しかしこのパートIIを観れば前作の内容も大体想像がつくというもの。パートIIは、あのドジなブリジットが、ハンサムで魅力的な人権派弁護士マーク・ダーシー(コリン・ファース)とラブラブ関係になって

いるところからスタート。テレビ局のレポーターとしての仕事に誇りをもちながらも、彼氏ができるとブリジットが考えることは毎日毎日、一瞬一瞬が彼氏のことばかり。すなわちもっと露骨に言えば、彼氏とのセックスのことばかり。恋愛状態にある女の子が考えることって、ホントにそうなの……？ 中年男の私にはサッパリわからないので、是非本心を聞かせてもらいたいものだが……。

## 太めすぎるのでは……？

ドジだが一生懸命な女の子をレニー・ゼルウィガーがうまく演じていることは認めるが、やはりどう見ても、太めすぎるのでは……？ これでは、どんな男性が見ても女性としての魅力は感じないのでは……？ 『コールドマウンテン』（03年）における女1人で生きていくたくましい役柄ははまり役だったし、2002年の第75回アカデミー賞主演女優賞にノミネートされた『シカゴ』（02年）での歌と演技はすばらしかったが、本作では女性としての魅力が全然……？

人がいいけれどもドジでいつも損な役回りを演じている、ちょっと太めの女そのものでは……？ ここまで言うちょっと失礼かな……？

## マーク弁護士は太めの女がスキ？

ところが、前途洋々でハンサムなマーク・ダーシー弁護士は、なぜかこのブリジット・ジョーンズが大のお気に入り。別に、女の好みにケチをつけるつもりはないので、それならそれで2人がハッピーになればいいわけだが……。

マーク弁護士の周りには工作上や人間関係上当然さまざまな魅力的な女性も……。その1人が若くて超美脚の令嬢レベッカ（ジャシンダ・バレット）。こりゃ誰が何といっても、ブリジットよりはよほどいい女。そのことは何よりもブリジット自身が1番よくわかっているから、やきもちをやいたり、ちょっとした行き違いからいろいろなトラブルも……。しかしその結果は……？ 何だかんだ言っても結局マーク弁護士は、本質的に（？）太めの女がスキということか……？

## 2人の男の決闘は……？

古今東西、1人の女をめぐる2人の男の決闘は絵になるストーリーだが、その

真剣さや面白さは、2人の男の魅力が拮抗していることが大前提……？ ところがこの映画に登場するもう1人の男ダニエル・クリーバー（ヒュー・グラント）は、ブリジットと同じテレビ局に勤めている同僚だが、どんな女にも手を出す最低の男。ところがなぜか、今は旅行番組の案内役として結構人気を博していた。そして「女狂いはきっぱりやめた」と宣言した上で、なぜかブリジットにモーションを。ところが……？ こんなダニエルとマーク弁護士がブリジットをめぐる展開する男同士の決闘シーンは、水しぶきをあびながらの殴り合いだが、あんまり格好いいものではない……。ましてや、ブリジットとデートの約束をしておきながら、外注(?)の金髪女と鉢合わせになるという不手際を招くダニエルは、やはり単なるセックスアニマル……？

### 笑いゴトではない、覚醒剤持ち込み疑惑

この映画におけるブリジット最大の危機は、恋の強敵レベッカの登場でもなければ、滑れないスキーを滑ることでもない。それは空港への入国の際、トランクに入れたおみやげ品の中から大量の覚醒剤が発見されたこと。犬からワンワン吠えられ、手荷物検査の結果、目の前でおみやげ品の中から大量の覚醒剤が発見されれば、「こりゃ何かのワナだ」と弁解してもそれが簡単に通らないのは当然。さあそうになると、人権派弁護士の登場!となるはずだが、その登場は遅い。しかも、釈放されることを伝えるためのメッセンジャーとしてやってきたとのこと。拘束中も一緒に拘束されている女性たちとマドンナの歌を正しく歌うための指導をしたりして楽しく(?)過ごしていたブリジットは、マーク弁護士の言葉をその額面どおりに受けとめたが……。果たして真相は……？

この映画はブリジット・ジョーンズの日記をそのまま映画化したもの(?)だから、彼女が日記を書き続ける限り、パートⅢ、パートⅣの製作も可能。しかしマーク弁護士からのプロポーズを受けて結婚まぢがいなしとなった彼女にとって、映画化できるほどの内容を維持できるのだろうか……？ そのネタがなければ、パートⅢ、パートⅣの製作は不可能となってしまうが……？

2005(平成17)年5月6日記